



Data	
監督・脚本:	李継賢 (リー・チーシアン)
出演:	張登峰 (チャン・トンファン) / 李傑 (リー・チエ) / 沈佳妮 (シェン・チアニー) / 趙海燕 (チャオ・ハイイエン) / 楊新平 (ヤン・シンピン)

👁️👁️ みどころ

近時、中国映画には『王妃の紋章』（07年）や『レッドクリフ』（08年）などの大作が目立つが、久しぶりに中国映画らしい中国映画が登場！

舞台は山西省の田舎町西幹道。時代は1978年冬。主人公は18歳と11歳の兄弟。そして2人に絡むのは、北京から引っ越してきた美しい少女。

タイトルの意味をかみしめながら映画を鑑賞し、その後1978年という時代を勉強してもらいたい。そうすれば、説明不足気味(?)の李継賢(リー・チーシアン)の監督第2作の良さが、より理解できるはず・・・。

この映画は日本人にも感動を与えるが、北京オリンピックに沸きかえる今の中国人が鑑賞し、30年間で「失われたもの」を感じとらなければならないのでは・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■主人公は、スーピンとファントウの兄弟！■□■

この映画の主人公は、18歳の四平(スーピン) (李傑/リー・チエ)と11歳の方頭(ファントウ) (張登峰/チャン・トンファン)という2人の兄弟。工場に勤めているスーピンはどうも毎日仕事サボって、廃墟となったビルの中の秘密の部屋で、自分で再生したラジオを操作しながら海外の放送を聴き、独自の世界に生きている様子・・・。他方、絵が大好きなファントウは、兄の工場の近くにある西幹道小学校に通っていたが、内気で口数の少ない彼はどちらかというといじめられ役・・・？

ある日、スーピンが工場をサボっていることが判明したため、しつめに厳しい母親(趙海燕/チャオ・ハイイエン)はキンキン声でどなり散らし、ファントウに対して兄の監視

役を命じたが、さてそれにどんな効果が・・・？他方、軍医をしているのだから地位が高いと思われる父親（楊新平／ヤン・シンピン）は家庭では無口で、母親が金切り声でわめいていることには介入しない主義・・・？

『シネマルーム17』＝『坂和的中国電影大観2』を出版したばかりの私は、これまで中国映画を約150本観てきたが、こんな兄弟2人を主人公にした映画ははじめて。さあ、そんな映画のテーマは・・・？

■□■『思い出の夏』から6年後・・・■□■

李継賢（リー・チーシアン）の監督デビュー作は『思い出の夏』（01年）。山西省の農村にやってきた映画の撮影隊から子役に登用された主人公が、「村に戻ってくる！」というセリフをどうしてもうまく言えないのはなぜ・・・？そんなテーマ(?)で、中国における都市と農村、少年の理想と現実を「ひと夏の思い出」の中に描いたシンプルな心温まる佳作だった（『シネマルーム5』273頁参照）。

1962年生まれのリリー・チーシアン監督は北京電影学院出身だが、監督科ではなく美術科の出身。したがって、デビュー作から6年後に監督第2作としてつくった『1978年、冬。』も、第1作と同様、リリー・チーシアン流「美学」へのこだわりが至るところに感じられる。もっとも、それはリリー・チーシアンと北京電影学院の同期生で撮影科出身の王昱（ワン・ユウ）が撮影指導したことの寄与も大きいようだ。ちなみに、ワン・ユウは『ふたりの人魚』（00年）（『シネマルーム5』253頁参照）、『パープル・バタフライ』（03年）（『シネマルーム17』220頁参照）という婁燁（ロウ・イエ）監督作品の撮影指導として有名なうえ、『たまゆらの女（ひと）』（02年）（『シネマルーム5』245頁参照）、『桃色』（04年）（『シネマルーム17』246頁参照）、『吳清源 極みの棋譜』（06年）（『シネマルーム17』249頁参照）等により、今中国で最も脚光を浴びるカメラマンとのことだ。

決して美しいとは言えず、むしろ荒涼とした山西省の田舎町西幹道の風景が、再三再四観客の目の前に突きつけられる。また、その風景の中に立つ人間たちのセリフはきわめて少なく、説明的部分はほとんどゼロ。それでも、「1978年冬」という中国の歴史的転換期に生きる主人公たちの営みと息吹がイキイキと伝わってくるから不思議。やはり映画はこうでなくっちゃ・・・。

■□■1978年という年は・・・？■□■

この映画の原題は『西幹道』、そして英題も『The Western Trunk Line』だが、日本人にはその意味はサッパリわからないはず。へたすると「西の幹線道路」などととんでもない誤解をするかもしれないが、これは中国山西省にある田舎町の名前。それに対して、邦題は『1978年、冬。』。この邦題は映画の中身に重点を置いて

つけられたものだ（もっとも、1年後の1979年冬も少しは登場するが・・・）。さあそこで、1978年という年にはどんな意味が・・・？それがわからなければ、この映画の奥深さも悲しみもきっちりと理解することはできないはずだ。

毛沢東の指導によって1966年5月に始まった文化大革命が終了したのは1976年10月。また、毛沢東が死亡したのは1976年9月。他方、鄧小平による改革開放政策が始まったのが1978年。ちなみに、北京電影学院が再開されたのも1978年。つまり、中国において1978年という年は、暗い文化大革命の時代と経済成長に突き進む改革開放の時代のちょうど転換期にあたる年になるわけだ。

もっとも、そんな大きな時代の転換期にあることがわかるのは、一部の指導者のみ。また、改革開放政策の恩恵を受けるのは一部の地域のみ。西幹道に住むスーピンとファントウには到底そんな息吹を感じることはできず、閉塞感の中で退屈な日々を過ごしていたわけだ。11歳のファントウはいつの日か展覧会を開きたいという子供らしい夢をまだ持っていたが、既に現実を知ってしまった18歳のスーピンに何の未来も希望も見えなかったのは仕方ない。そんな1978年冬の今、2人の前にはある大きな変化が・・・。

■なぜ、シュエンが引っ越してきたの？■

ある日、スーピンが家の前で見したのは、お下げ髪の良い少女雪雁（シュエン）（沈佳妮/シェン・チアニー）。シュエンは北京に住んでいたが、父親と別れてスーピンの家の前に住む親戚の家に引き取られてきたらしい。なぜ、シュエンが1人でこんな田舎にやって来た（都落ちしてきた）の？それは、きっと父親が「反革命」のレッテルを貼られたため・・・？「北京の金山の上」を踊るシーンや、いつも二胡を肩に担いで歩いているシーン、さらに父親宛てた手紙を読むと、シュエンは歌と踊りが大好きな少女らしい。彼女は父親宛てに「文芸団員になりました」と手紙を書き、健気にも仕送り（？）まで同封したが、実はその文面はウソ。しかして、それは一体なぜ・・・？

リー・チーシアン監督はこの映画でナレーションを一切使っていないから、1978年当時の「中国事情」を知らない人には、この映画がわかりづらいのは仕方ない。しかし、そこはパンフレットを読んだり、ネットを調べたりして勉強しながら、なぜシュエンがこ



んな田舎町に引っ越して来たのかを理解してもらいたい。だってそれがわからなければ、なぜ彼女が孤独なのか、そして、なぜ彼女と2人の主人公をめぐるこんな物語が成立したのかがわからないはずだから。

ちなみに、リー・チェもチャン・トンファンも映画初出演というド素人だが、シュエンを演ずるシェン・チアニーだけは中央戯劇学院演劇科4年生で、テレビや映画出演の経験があるとのこと。この映画では荒涼とした冬の西幹道を歩くシーンが多いが、顔が小さく背の高い彼女を観ていると、八頭身をはるかに超えた十頭身・・・？異様に胴と足が長いとさえ思えたが、そんな彼女に注目し今後の活躍に期待したい。

■□■恋に不器用なのは当たり前・・・■□■

何とかこんな街から早く脱出したい。そう願っていた18歳のスーピンが、突如目の前に現れた美しい少女シュエンに対して特別な興味と関心を示したのは当然。もっとも、その興味と関心がいかなる感情なのか、つまりこれが恋という感情なのかどうか、彼にはきっとわからなかったはず。そんな彼が女に対して、また恋に対して不器用だったのは当然だろう。したがって、その後彼がシュエンに対してとる行動は、ストーカーまがいのことばかり・・・。最悪なのは、彼女が父親宛に出した手紙をポストから抜き出して封を切ってしまうこと。さらに、その中に入っていた仕送りの金を盗み、それで餃子を食べるとは何たること！しかし面白いのは、封筒の中に手紙が入っているを見つけそれを読んだスーピンが、盗んだ金が病気の父親宛の送金だったことを知った後にとる行動。これ以上書くとネタバレになってしまうので書けないが、恋に不器用なスーピンのそれ以降の行動には胸が熱くなってくるはず・・・。

シュエンは真面目に工場で働いていたが、スーピンは相変わらずサボってばかり。そんな2人が秘密の場所でデート(?)を重ねるようになったのはなぜ・・・？前述のように、この映画では説明めいたものがゼロだから、父親の病気の悪化によってしばらく離れていた2人が久しぶりに秘密の場所で再会した後、父親が亡くなったことを打ち明けたシュエンが、突然服を脱ぎ始めるシーンにはビックリするはず・・・。

毎日工場をサボっているスーピンが解雇通知を受けたのが当然なら、2人の秘密の逢う瀬がバレたのも当然。ハリウッド映画にもフランス映画にもそして日本映画にもない、1978年冬の西幹道におけるこんな2人の不器用な恋の行方に注目しよう。

■□■11歳のファントウは・・・？■□■

他方、11歳の弟ファントウにとっても、自分の描いた絵を誉めてくれたうえ、「展覧会が開ける」と言ってくれたキレイなお姉さんに憧れの気持を抱き、大好きになったのは当然。したがって、シュエンからもらった画用紙は、彼にとっては宝物！

そんな弟の姿に嫉妬した(?) スーピンがある夜とった意地悪な行動には思わず笑ってしまったが、当のファントウにとっては大変。だって、スーピンの意地悪によって湯たんぼのお湯を股間に流されたファントウは、翌朝、11歳になってもまだおねしょをしているとシュエンに思われてしまったのだから……。

また、スーピンがシュエンと秘密の場所でデートしていることがバレたり、スーピンが工場を解雇されたりしたため、ファントウが「不良の弟!」とみんなからバカにされるようになったのはかわいそう。しかも集団でファントウの服をはぎ取るとは何たること! そんな時にファントウのとった思い切った行動にはビックリさせられるが、これもリー・チーシアン監督自身の体験談……?そして、リー・チーシアン監督も、兄貴の不祥事のためにこんな苦勞をさせられたのだろうか……?

■□なぜスーピンは軍隊に……?■□

韓国は徴兵制だから、軍隊に入った恋人との別れのシーンがよく映画に登場する。しかし、中国は徴兵制ではないから、スーピンは別に人民解放軍に入隊する必要はないのに、自分のせいで弟がとんでもないいじめにあっていると知ったスーピンは、突然軍隊を志願することに。そこらあたりの説明も不十分(?)だから、しっかりスクリーンに目を据えて、ストーリーの流れを心に感じなければ……。

列車に乗った息子を軍隊に送り出すべく家族が別れを告げるシーンは、ハリウッド映画でもヨーロッパ映画でも日本映画でも韓国映画でもすべて絵になるもの。あんなに厳格だった母親がここではじめてスーピンに対して流す涙を観て、「ああ、やはり」とあなたは納得するはず。また、リー・チーシアン監督らしい何とも美しいシーンは、建物の陰から現れたシュエンが列車を追って走り始めるシーン。もちろん、いくら走っても追いつくはずはないのだが、列車の中からそれを見つめるスーピンと必死に走り続けるシュエンの美しいシーンは、きっとあなたの胸に刻み込まれるはずだ。

海軍に入り、艦隊勤務についたスーピンは元気にその任務を遂行しているように思えたが、1978年の冬が終わり、翌1979年の冬を迎える頃、物語は意外な展開に……。

■□リー監督は、スーピンとファントウのどちら?■□

この映画は、1962年生まれのスーピン監督の子供時代の思い出と強く結びついたもの。したがって、登場人物のすべてにモデルがいるらしい。すると、リー・チーシアン監督はスーピンとファントウのどちら……?

そこでパッと年代を計算できれば大したものだ。1978年当時彼は16歳だから、スーピン、ファントウのどちらとも言える年齢。しかし、映画を観ながら、2人の主人公のうちどちらに重点があるのかと考えると、それは明らかに弟のファントウの方だから、きっ

と監督は弟のモデル・・・。そう思ってプレスシートを読むと、大正解！つまり、この映画は11歳の弟ファントウの目から見た1978年冬の西幹道を描いたものなのだ。

1978年といえば、私が弁護士登録をした1974年の4年後で、大阪国際空港公害訴訟弁護団や西淀川公害訴訟弁護団などで、毎日夜遅くまで走り回っていた時代。そして、文化大革命や改革開放政策のニュースは知っていても、中国山西省のこんな風景など全く想像もできなかった時代だ。田中角栄と周恩来の握手によって、日中の国交が正常化されたのが1972年9月29日。そして、1978年8月には日中平和友好条約が調印されている。考えてみれば、中国ニューウェーブと呼ばれた陳凱歌（チェン・カイコー）監督の『黄色い大地』（84年）がロカルノ国際映画祭で銀豹賞を受賞したのが1985年だから、それまで中国映画は日本人には全く縁がなかったもの。そんな時代に子供時代を過ごしたリー・チーシアン監督が、1978年冬の西幹道を描く目はたしかなもの。この映画によって私たち日本人も、そんな国の、そんな時代の1コマをしっかりと味わいたいものだ。

2008（平成20）年5月17日記

重大な歴史の転換期 温かい視線で



1978年、冬。

きょうからシネ・リーブル梅田で公開



©2007 China Film Group Corporation & Wako Company Limited

の中で、三人三様の孤独で屈折した心模様は淡々と描かれる。

窃盗事件、密会事件、いじめ事件などを経て四平は軍隊に入るが、その後訪れる不幸な結末とは？

最小限のセリフと一定の距離感をキープしたカメラワークだが、それが逆に、重大な歴史の転換期を西幹道で生きた彼ら三人の苦悩とそれを今温かく回顧する監督の思いを伝えてくれるからこの

この映画は中国第六世代監督李継賢の子どもの時代を投影した十一歳の弟方頭と十八歳の兄四平を軸とした家族の物語。重要なのは時代背景だ。日本は一九七〇年代も経済成長を続け「わが世の春」を謳歌したが、中国は？

七七年に終焉したが、その爪痕は甚大。他方、四つの近代化と先富論を掲げた鄧小平による改革開放政策の開始は七八年十二月。以降中国は市場経済への移行と対外開放を急速に進めたが、原題である山西省の田舎町「西幹道」での一九七八年冬は？

シオと都会に憧れる四平が美しい少女雪雁に魅かれたのは当然、雪雁が北京からやって来たのは知識階級の父親が文革で弾圧されたため？ また「展覧会が開ける」と言われてくれた彼女を好きになつたのも当然、美しい大連や青島とは全く違う荒涼とした西幹道の風景

映画は素晴らしい。とりわけ、八頭身ならぬ十頭身の雪雁が必死に四平の乗った列車を追っかけるシーンは圧巻！

チベット騒動と四川大地震に揺れた中国も、北京オリンピックまであと一カ月。そんな今の映画からホントの中国を考えた。

大阪日日新聞 2008（平成20）年7月5日